地域で支えあう・城南町

城南町では、町内会・ご近所・地域のお店が連携をして、認知症の家族を支援しています。

今回、家族・町内会・社会福祉協議会の人に話を伺いました。

◎北川弘巳（ひろみ）さん（家族）

アルツハイマー型認知症の母親を施設に入所するまでの3年間、妻・2人の息子と自宅で介護していました。

■どんな症状が

散歩に出かけると、帰宅まで時間がかかるようになり、やがて帰宅できなくなりました。夜中に家を出て小川町で保護していただいたことも。財布をしまった場所を忘れて、思い出せないと誰かが盗ったと言い出します。夜トイレが分からずにベランダで用を足したこともありました。

■地域の人の助け

母の徘徊（はいかい）のたびに、わたしと家内がバタバタしていたので近所の人は「どうしたの」と声をかけてくれましたが、打ち明けることができませんでした。

ある時、母のことに気づいた町内会長が「近所の人にお母さんのことを明らかにして、手助けをお願いすることにしたらどうか」と声をかけてくれました。徘徊をする母を家族だけで探すことに限界を感じていましたので、家族とも相談して協力をお願いしました。

福祉委員会でチラシ（写真参照）を作成して、地域の人や徘徊時に立ち寄りそうなお店に配布して見守りの協力をお願いしました。当初、母のことを隠したかったのですが、明らかにすることで、近所の皆さんに支えてもらいました。

配ったチラシ

■みんなに話をするのは

認知症については老人クラブで勉強会を開いています。しかし、自分の母が認知症になるとは考えもしませんでした。わたしが悩んでいる時に、近所の人たちにお世話になりました。皆さんに感謝の日々です。

◎松岡万里子（まりこ）さん（家族）

アルツハイマー型認知症の義母を、8年間、夫と3人の娘と自宅で介護をしています。

■どんな症状が

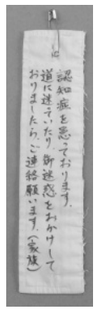
父の入院に付き添った母を見た看護師が、「お母さんも、一度診察を受けたほうがいい」と気づいてくれて認知症が分かりました。早期診察の機会が得られ、初期のうちから進行を遅らす薬を処方してもらえたので、良かったです。高価なゲーム機を一度に2台買ってきたり、便座カバーをケーキと思い込み口にしていたりしたことも。とにかく大声を出して歌い続けます。

■地域の人の助け

母は、散歩が好きで、決まって同じ時間に出かけていきました。そこで、連絡先と母のことを説明した布を背中に縫い付けて、外出させました。また、徘徊時に立ち寄りそうなお店には、お願いに回りました。お店の人も以前から「変だなあ」とは思っていたようでした。工事現場の人から「危ないからここで預かっているよ」とか、知らない若者が「同じ方向だったからついてきたけど、ここからは方向が違うので」と連絡をくれたことも。近所の人のさりげない見守りもうれしかったです。

本当に助かったのは、町内会長が散歩中の母を見つけると、付き添ってくれたことです。城南町に引っ越してきたとき、町内会に話をしました。知っている人が見守っていてくれる安心感は違います。

●背中に付けた布表面（連絡先）


●同裏面（説明とお願い）

■みんなに話をするのは

症状を話したときの相手の反応はさまざま。知らないところでは、刺さるような視線が恐怖です。でも、理解してくれる人がいるところには、安心して母を連れて出かけられます。

家族が地域の人に、「助けて」と言えるようになると良いと思います。まず自分がそうすることで、今度は娘たちができるようになってくれるとうれしいです。

◎藤野千秋（ちあき）さん

城南町町内会長。町内における高齢者、障害者などの要援護者の支援に取り組んでいます。

■講師の言葉が

地域活動の研修で講師に「認知症家族は負荷を抱えている。その負荷を軽くしてあげれば、その人は地域で暮らしていけるんだ」と言われ、何ができるのか町内で考えました。

■どんなことを

北川さんの場合は、町内の福祉委員会で、お母さんのことが話題にあがりました。皆さんが、「そのおばあさんならよく会うよ」「わたしはここで」「わたしも」と。それを地図に記入してみたら、北川さんのお母さんの徘徊マップができていました。それがきっかけで、北川さんに「明らかにすることで地域の支援が受けられるよ」と話しました。北川さんと一緒に福祉委員会としてチラシを作り、近所にお願いしました。

松岡さんの場合は、散歩しているお母さんに出会うと、一緒に歩きました。危険だと思う個所は、回るように誘導し、それ以外は、松岡さんの気の向くままに。1時間ほど歩くと疲れてくるので、家に送りました。

■地域は変わった

そんなことが地域の人に伝わり、城南町では認知症は、「隠す」から「明らかにする」ことに変わりつつあります。「実はうちの親も認知症なんです」と気軽に声をかけてくれるようになりました。

■課題の解決に向けて

ここまで認知症の問題をはじめ、町内の福祉課題の解決に向けて取り組んできましたが、自分たちだけでは解決できないことがあります。そんなとき、相談できる場所として社会福祉協議会があり、相談できる人として社会福祉協議会の職員がいます。

こういう関係を普段から築いておくことが大事だと思います。

◎吉村了子（りょうこ）さん

安城市社会福祉協議会職員。町内ごとにある福祉委員会の活動を側面的に支援しています。

■助けられ上手に

福祉委員会で個別の福祉課題を解決するのは、困難な部分があります。そこで社会福祉協議会では、専門機関につなげたり、地域の皆さんとともに、地域での支援のあり方を考えています。

日本人は、困っている人を見かけても、自分からはなかなか手が出せないでいますが、助けてほしいと頼まれれば助けてくれる人はたくさんいます。助けてほしい人が声を出してくれると、手助けしやすくなり、助け合える町になります。社会福祉協議会では、「助けて」が言いやすいあたたかい地域づくりを目指しています。これは、急いでできるものでもないので地道に活動していきます。